夏の夜空に想いを寄せて

猪名川花火大会

8月20日㊏

午後7時20分～8時20分

（荒天中止・順延なし）

〝令和初〟の猪名川花火大会

平成30年（2018年）以来、実に4年ぶりとなる猪名川花火大会。たくさんの方が開催を心待ちにするも令和元年は台風の影響で、2・3年は東京2020オリンピック・パラリンピック開催に伴う警備員不足により中止となりました。今年こそはと、新型コロナウイルスへの感染対策を講じた上で、開催に向けての準備を進めています。

同大会が行われなかったこの数年の間で、世間ではさまざまな変化があり、これまでの日常が当たり前ではなくなってしまった人も少なくありません。花火の光が心の癒やしとなって、人びとを少しでも勇気づけられますように。開催はもう間もなくです。

猪名川花火大会 information

場 猪名川河川敷（阪急「池田駅」下車、徒歩約10分） 問 空港・観光課☎754・6244 ※当日の開催状況については、自動音声案内☎050・1807・0902または市ホームページをご覧いただくか、市公式LINEでお知らせします。

市ホームページ　市公式LINE

「上空にデザインを描き、光と音を加えることで季節感を自由に演出できるところが花火の魅力」と語る㈱柿木花火工業の柿木博幸さん。同大会の花火を制作する柿木さんにお話を聞きました。

4年ぶりに開催される花火大会に向けて

花火づくりは、酸化を防ぐための原材料の細かな管理や、雨水を確保して使う必要があるなど、とても気を遣います。また工場では分担して部品を作り最後に組み合わせるため、全てがバランス良くできて初めて良い花火が完成します。そして無事に終わるまでが大事だと考えています。

今大会では「青い衝撃：ブルーインパルス」と呼ばれる青色花火と、わびさびを表現した「炭火先青変紅点滅」という2つの花火をぜひ見ていただきたいです。青色花火は柿木ブルーとも呼ばれる、当社が開発した珍しい青色の花火です。炭火先青変紅点滅は、上空で開いてから中間までは炭火の薄いオレンジ色の炎で落ちてきて、その後急に濃い青色へと変化し、地上近くで消えかけるときには明るい赤色へと変化する花火です。明暗の違いを最大限に生かしたこの特徴は、他の花火では味わえません。

今大会ではその他にも多種多様な花火を用意していて、打ち上げる種類としては周辺の花火大会でも一番ではないかと自負しています。

コロナ禍を経験して、花火は心に大きく響き、勇気と元気を持ってもらえることに気が付きました。また、多くの方から手紙や寄付などもいただきました。これらの想いと感動を込めて打ち上げます。そして多くの関係者のご苦労のもとで開催できる喜びを猪名川の夜空に表現できればと思っています。

周辺道路の交通規制・駐車禁止

●会場周辺地域

時 午後６時～10時（予定）　場 右記地図参照

※会場周辺に駐車場・駐輪場はありません。周辺地域での車の使用はお控えください。また、終了後は大変混雑します。係員の誘導に従って行動してください。

●阪神高速道路の通行止め

時 午後７時～10時（予定）　場 池田分岐～池田木部ランプの上下線

※川西小花出入口は午後５時ごろから閉鎖します。

協賛金を募集

申 ８月31日㈬までに、直接空港・観光課へ持参してください。

※花火大会が中止の場合でも、協賛金の返金はありません。

当日の注意事項

会場準備のため、観覧の場所取りは当日にしてください。前日までの場所取りについては撤去します。また、当日であっても風向き・風速など天候の関係上、場所の移動をお願いすることがあります。当日、アルコールの販売は行いません。また、店舗数の削減や販売品目の制限を検討しています。なお、会場内でのバーベキューやドローン・ラジコンは使用禁止です。会場周辺や、路上で機器を飛ばす行為は犯罪行為です。その他、会場の仮設トイレは午後５時から使用できます。

新型コロナウイルス感染症対策のため、密となる場所ではできる限りマスクの着用にご協力ください。

がんがら火祭り

300年以上に渡り引き継がれてきた伝統の炎

新型コロナウイルス感染症の影響で、子ども松明（たいまつ）や大松明が巡行するのは3年ぶりとなるがんがら火。江戸時代から300年以上続く本市の祭礼をご紹介します。

問 空港・観光課☎754・6244

脈々と受け継がれてきた愛宕火

毎年8月24日の夜に執り行われてきた「愛宕火」の祭礼。城山町と建石町でそれぞれ行われていることは意外と知られていないかもしれません。

城山町では、五月山山頂の愛宕神社から御神火をもらい受け、五月山に「大一」の文字火を灯します。町中では大松明が威勢良く練り歩き、半鐘や八丁鉦（かね）の音が響き渡ります。一方建石町では、京都愛宕神社からあらかじめもらい受けた御灯明で五月山に「大」の文字火を灯し、八丁鉦とともに星の宮（建石町1）まで子どもたちが松明を持って行進します。本市では、これらを親しみを込めて「がんがら火」と呼んできました。

このような形態が異なる2つの祭礼が連綿と続いてきたことは非常に珍しく、平成22年には府の無形民俗文化財にも指定されるなど、本市が誇る歴史・文化的価値のある祭礼として大切に受け継がれてきました。

①子ども松明の行列
②市内を練り歩く大松明
③愛宕神社の御神火
④大松明を見ようと集まった観覧客
⑤大文字が灯る大明ケ原
⑥ビッグハープと大一文字

がんがら火始まりと移り変わり

正保元年（1644年）、多田屋・板屋・中村屋・丸屋の4人が五月山山頂で火を灯したところ、人びとがその火を見て「池田に愛宕（火の神）が飛来した」といいながら山に人が集まったことが始まりとされています。

文字火は、文政2年（1819年）の「伊居太神社日記」には、現在の大明ケ原に「大」の文字火が、鳥居付近に「一」の文字火が灯されたとされ、このとき既に慣例化していたことが記されています。

燈籠による文字火は明治時代末に廃止され、現在の城山町の「大一」文字になったのは大正の末からで、また大松明を担いで市内を練り歩くようになったのは昭和3年（1928年）からといわれています。このように時代により少しずつ形を変えながら、がんがら火は城山町・建石町の人びとによって現在まで受け継がれてきました。

※当日の詳細は、裏表紙をご覧ください。